

視点

シネマテークたかさきで見
た「終わりなければすべてよ
し」という映画。八十一歳に
なる羽田澄子監督が、終末期
医療をテーマにした長編ドキ
ュメンタリーだ。

病院での死が当然の世の
中。最期は点滴、経管栄養、
排尿チューブ、人工呼吸器や
心電図モニターなど配線・配
管だらけの状態。これをスパ
ゲティ症候群というらしい。
フォークから何本ものスパゲ
ティが垂れ下がっているイメ
ージだ。

できる限り生命を引き延ば
すことを本人は望んでいるの
か？ 家族の思いや医療者の
義務で延命が行われていない
か？ 自宅で安らかな死を迎
えるにはどのようなサポート
システムが地域に必要なのか
？ この映画は、終末期を自
宅で迎えられる在宅医療の整
備が緊急課題であると訴えて
いる。

映画に登場する先進国のオ
ーストラリアとスウェーデン
では、病气や障害がある高齢
者が自宅で過ごせるよう、二
十四時間対応の往診・訪問看
護・訪問介護や、一時的な入
院・入所施設などの一体的な
公的サービスシステムが運営
されている。

わが国の先進例も幾つか取
り上げられていたが、二十四
時間対応の医師・看護師など
の訪問医療と入所系サビス
との連携した体制は、まだ数
が少ないのが現状である。

さらに、どのような最期を

迎えるかを高齢
者が自らの意思
で選べるように
なるには、助か
る見込みがない
のに苦痛を引き延ばすような
無駄な延命を中断しても、医
療者が殺人罪に問われないよ



前橋市下新田町

やす
保 晴やまぐち
山口

群馬大医学部教授

安らかな死を自宅で

意思表示が求められる。最期
にどこまでの延命治療をして
ほしいのかを記入・署名して
おく「事前指示書」だ。わが
国では尊厳死協会が書式を提
供している。最近、米国の事
前指示書「私の四つのお願い」
が箕岡真子さんらによって和
訳され、インターネットで無
料ダウンロードできるよう
になった (<http://www1.ocn.ne.jp/~mbt/>)。
医療のことだけでなく、「愛
する人々に知っておいてほ
しいこと」を含めて、自分の気
持ちを家族や後見人に伝える
ものだ。元氣なうちから用意
してはいかがか。

ムービックス伊勢崎では
「シッコ」という映画を見た。
米国の医療保険の問題点を鋭
く指摘した映画で、医療保険
会社があくどく利益を追求す
る姿に驚きを禁じ得なかつ
た。米国では無駄な延命の心
配はないようだ。なぜなら医
療費を払えない人に対しては
診療しないから。入院して医
療費を支払えない高齢者が病
衣のままタクシーに乗せられ
て、高齢者保護施設の前で放
り出されるシーンがあった。
延命以前の問題である。利益
のために倫理をなくした国、
それが今の米国だ。

小泉改革によって日本も米
国同様、弱者淘汰の市場原理
主義が強まった。本県出身の
福田康夫首相はどの方向に舵
を取ってくれるのだろうか。
高齢者が元気に過ごし、最期
はコリと往生できる社会を
めざしてほしいものである。

【略歴】高崎市出身。群
馬大医学部卒、同大学院
修了。医学博士。日本認知
症学会理事、県リハビリテ
ーション協議会委員長。認
知症に関する著書もある。

終末期医療

オピニオン21